

## 「太平洋の時代」は到来するか

著者	石川 榮吉
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	85-87
発行年	2006-02-24
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001611">http://doi.org/10.15021/00001611</a>

## 10 「太平洋の時代」は到来するか

10 「太平洋の時代」は到来するか

10.1 「太平洋の時代」の背景

10.2 文明としての太平洋の時代

10.3 太平洋圏の文化交流の実態

10.4 環太平洋から太平洋へ

### 10.1 「太平洋の時代」の背景

21世紀は太平洋の時代だ、とは最近よく耳にする言葉である。言うところの意味は、文明の中心が大西洋から太平洋に移動しつつあるということである。

世界史的にみて、古代文明はギリシャ、ローマとか、小アジア、エジプトなど、地中海をめぐる諸地方に栄えた。それが、近世・近代になるにおよんで、大西洋をはさんで対峙する西欧と北米とによって、世界の文明がリードされるにいたった。文明の中心が地中海から大西洋に移ったと称されるゆえんである。

それが今また、大西洋から太平洋へ移行しつつあるという。太平洋を中にはさんだ北米と東アジア、東南アジア、そしてオーストラリア、ニュージーランドといった、いわゆる環太平洋諸地域が、来たるべき21世紀の文明の担い手になるであろう、ということである。

歴史哲学者シュペングラーの『西洋の没落』が著わされたのが、1918～22年のことであつた。80年以上も昔のことである。シュペングラーの予見にもかかわらず、ごく最近まで（あるいは現在まで）、ヨーロッパの優位はよく保たれたというべきであろう。しかし、少なくとも世界経済の動向についてみるかぎり、ヨーロッパの先進性には翳りがでずすでに久しい。巨人アメリカは言わずもがな、今や日本を抜きにして世界経済を語ることはできない。太平洋をさしはさむ両国によって、世界経済がリードされる時代となっているのである。加えて、韓国、台湾、香港、シンガポールの目ざましい経済的躍進があり、経済の近代化を目指す中国の潜在力や資源大国オーストラリアの存在も、にわかにはクロースアップされてきている。この意味では、太平洋の時代はすでに到来している、といてよいかも知れない。

### 10.2 文明としての太平洋の時代

しかし、文明という大きな次元での太平洋時代ということになると、はたしてそれが21世紀に現実のものとなりうるのかどうか、速断はできない。文明の基礎に経済があることは事実であるが、経済だけが文明なのではない。一つの文明が構築されるためには、

経済を含めた広範ないわゆる文化交流が前提命題とされる。文化は文明と違って、もともとローカルなものである。そうしたローカルな諸文化の交流を通じて形成される普遍的な価値、それこそが文明である。

太平洋に即して言えば、太平洋圏に属する諸民族文化の交流こそが、太平洋文明構築のための第一歩なのである。そして、太平洋文明が世界をリードするとき、太平洋時代の名称が、真に世界史的意味を担いうることとなる。

### 10.3 太平洋圏の文化交流の実態

さて、こうした見地に立つとき、太平洋時代の到来は、まだよほど先のことと思わざるをえない。太平洋圏の文化交流が、まことに貧しい現状にあるからである。日本についてみれば、なるほどアメリカとの交流は活発であるし、東アジアや東南アジアとの交流も近年かなり活気を帯びてきてはいる。しかし、オセアニア諸国、諸地域とのそれともなれば、現状ではお寒いの一語に尽きるであろう。オセアニアのうちでも、オーストラリア、ニュージーランドの両白人国家の場合はまだしも、その他の島嶼国家、島嶼地域については、その存在自体さえ知らぬ日本人が珍らしくないのである。文化交流どころの話ではない。

考えてみれば、これも無理のないことで、明治このかたの日本の指向するところは、常に欧米先進諸国をモデルとして、これに追いつき超越すことにあった。学校教育にしてからが、私たちはいつも欧米中心の大国主義の歴史・地理教育を受けてきた。19世紀以降欧米諸国の植民地とされ、海洋こそ広大でも陸地面積は狭小で、人口も資源も乏しい太平洋の島々など、一顧だにしてこなかったというのが、実情に近かった。太平洋が一般日本人の視野に入ってきたのは、ミクロネシアについては、この地域が第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治領として日本の版図に加えられてからであったし、その他の太平洋諸島ともなれば、太平洋戦争によってそれらの島々が激的な戦場となってからのことである。したがって、日本の敗戦とともに、太平洋が再び私たちの視野から遠ざかってしまったのも、けだし当然のなりゆきではあった。

### 10.4 環太平洋から太平洋へ

第二次大戦に敗れたことにより、日本人の欧米指向は戦前にも増して著しくなった。戦後、第三世界の興隆により、その重視を口にしざるをえなくなりしはしたもの、多くの場合、それは空念仏か、それに近いものにすぎなかった。太平洋の彼岸のアメリカには絶えず熱い視線を注ぎながら、太平洋の島々とそこに住む人びとには、ほとんど目を向けることなく、現在にいたっている。この調子では、太平洋文明の構築、太平洋時代の到来を、近未来の予測として語るなど、とうていできるものではあるまい。それを語るにしても、日本人が一番用心しなければならないことは、現代日本人の抜きがた

い大国主義、経済至上主義から、人口が少なく、国土も狭小で資源に恵まれず、売るにしても買うにしても市場価値の低い太平洋の小島嶼国家や諸地域を軽視もしくは無視して、太平洋時代や太平洋文明を構想することである。太平洋時代は環太平洋時代であるべきではない。環の中の小国家群や諸民族が加わってこそ、初めて太平洋の名を冠するにふさわしいというものである。